



2014.10.1

10月ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

「本物の子ども時代を過ごしたもののだけが、本物の大人になる」という言葉を、皆さんはどのように受け止められるでしょうか。子どもたち、そして若者の様々な課題や事件を見聞きするたびに、彼らはどのような子ども時代を過ごしたのだろうかと思ひます。

親に褒められたい、認められたいという気持ちから、自分の気持ちを抑えて、親の過剰な期待に必死にこえようとする子どもがいます。また、大人の価値観で子どもに課題を与え、また行動を指示し、それに従う姿を見て「よく訓練されている、よく躾けられている」と評価する大人もいることも事実です。

また、ある大人は「子どもたちの遊びは幼稚でくだらない。もっと勉強に繋がる教材を与えた方が将来に役立つ」と様々な教材を与えようとしてます。確かにそれらの教材は、数字や文字を効率的に学習するためには役立つ、小学校に入る前に小学1年生の文字も計算もすべて習得してしまっているかも知れません。しかし、そういった時間や場面が増えれば増えるほど、子どもが自分自身の興味や関心から自ら動き出し、選り取る経験は少なくなっていきます。課題を与えられることが当たり前になり、「次は何をすれば良いの」「これで良いの」と課題と評価ばかりを求めるようになります。現代の若者の課題として、「自分自身で考えて判断出来ない」「言われないと何も出来ない」等とはよく言われることですが、そのような育ちを経たのであれば当然とも言えるのではないのでしょうか。幼少期から、自分で考えて遊びを広げて本物の楽しみを知り、また友だちと遊ぶ楽しみを十分に経験し、しかしある時には失敗や間違いも経験して、落ち込んだり、どうすればよいのかを考えたりして成長していくのが本来の姿であるはずで、子どもには子どもの世界の中で、子ども自身がまた子ども同士が解決できる課題が与えられています。そして、それらの解決を自ら見出した時に、子どもたちは本当の意味で成長するのです。

「子どもの仕事は遊び」という言葉も最近あまり聞かなくなってきませんが、幼児期から「子どもの仕事は勉強」といった毎日を過ごしているのであれば、子ども自身が工夫して遊びを広げ、人からの評価ではなく、自分自身が納得して満足する「生きる喜び」を感じることもないでしょう。人間はこの「生きる喜び」を知っているからこそ、失敗や困難に直面してもあきらめずに乗り越えていくことが出来るわけですし、そのような経験を通して「生きる力」は養われていくのではないのでしょうか。

子どもには自ら成長する力が与えられており、信頼されるからこそ、その力を発揮することが出来るのだということを親自身が信じて子どもを見守り、そしてその子どものすべてを受け止めることが大切であることを忘れないでいたいと思ひます。

10月主題 「ふれあう」

聖句 “主よ、あなたは全てを知っておられる。”

(詩篇 139 : 4)